

研究論文

東京第二師範学校男子部附属小学校の  
社会科単元指導計画修正における  
『小学校社会科学習指導要領補説』(1948) の影響  
— 小山昌一の研究活動の役割に着目して —

篠崎 正典<sup>※</sup>

Effects of “The Supplement to the Course of Study for Social Studies in Elementary Schools”(1948) on the Revisions of Social Studies Unit Teaching Plans of the Elementary School Attached to the Tokyo Second Normal School for Men: Focusing on the Role of Research Activities of Sho-ichi KOYAMA

Masanori SHINOZAKI

1. はじめに

本稿の目的は、1947年度文部省教科書局実験学校である東京第二師範男子部附属小学校（以下、東京第二男子附小）が1948年以降に行った社会科単元指導計画修正における『小学校社会科学習指導要領補説』（以下、『補説』）の影響について、編纂委員の小山昌一（在職1939年8月－1954年2月）の役割に着目して明らかにし、「作業単元」導入の一端に言及することにある。

成立期社会科は、『学習指導要領一般編（試案）』（1947）で「教育課程はそれぞれの学校でその地域の社会生活に即して教育の目的を吟味し、その地域の児童青年の生活を考へて、これを定めるべきものである」<sup>1)</sup>とされ、学校や地域の特色を生かした自主的なカリキュラム開発が奨励される中で実施された。その際、「作業単元」(Unit of work) による「単元の展開の仕方」<sup>2)</sup>を研究し、社会科単元指導計画を作成して実践することは、各学校が抱えた大きな課題であった。したがって、現場実践における「作業単元」の導入の実態について検討することは、成立期社

---

※信州大学教育学部助教

会科の実施状況を捉える上で、重要な作業である。

しかしながら、「作業単元」の導入については、これまでの社会科成立史研究で十分に検討されてきたとは言い難い。それは、「作業単元」は民間情報教育局（Civil Information and Education Section, 以下 CIE）の事務官ヘレン・ヘファナン（Helen Heffernan, 以下ヘファナン）の指示で1947年5月発行の『学習指導要領社会科編 I（試案）』（以下、『要領 I』）に附録として添付されたが、実践の際に社会科と他教科との関係が不明確になり、現場教師の混乱を招いたため、1948年9月に『補説』が発行されたこと<sup>63</sup>、『補説』に示された「作業単元」の作成方法と展開例が各学校で多様な社会科実践を生み出す要因となったこと<sup>64</sup>が指摘されてきたためである。そのため、先行研究では、本格的な「作業単元」導入のきっかけとして『補説』を位置づけ、その内容構成を中心に検討してきた<sup>65</sup>。よって、『補説』発行前後の文部省と現場の状況を踏まえた検討が十分になされていないため、「作業単元」の具体的な導入過程は不明なままである<sup>66</sup>。

そこで本研究では、1946年12月に、教科書局から1947年度の実験学校に指定されて社会科研究に取り組んだ東京第二男子附小による社会科単元指導計画の修正（1948-1949年10月）に着目したい。それは、東京第二男子附小が実験学校の中でも、次の2つのことを踏まえて研究を行うことができたためである。1つ目は、『補説』発行前の1947年8月以降から、ヘファナン、文部省の事務官、東京在住の教育関係者で結成された初等教育研究協議会の研究成果を踏まえて「作業単元」を導入する動きがあったことである。2つ目は、1948年以降は、社会科研究主任の小山教官が、委員として『補説』の編纂にも関わりながら、当校の社会科研究を推進したことである。したがって、この2点から当校の動向を検討することで、『補説』発行前後の文部省や CIE との関わりの中で行われた「作業単元」導入の一端を捉えることができると考える。

東京第二男子附小の動向に触れた先行研究では、上記の1つ目については検討されてきたが<sup>67</sup>、2つ目については検討されてこなかった。そのため、当校が1948年以降に取り組んだ社会科単元指導計画の修正とその特色については、アメリカから流入した新教育思潮に対応できなかったという評価<sup>68</sup>や『『系統的な学習体系』を重視し、『三 コア・カリキュラム+教科教育』という立場』を取り、社会科は単元学習の中で行っていたという教育課程編成上の特色の指摘<sup>69</sup>に留まっている。こうした中で、谷本による、「小山の昭和22(1947)年12月以降23(1948)年

2月にかけての取り組みは、東京第二師男子部附小が初等教育研究協議会で協議された『経験領域』の考え方（3・4学年：地域中心）や大単元の作業単元による社会科展開方法を採用するだけでなく、社会科をコアとする学習やカリキュラムへと全面的に移行するための試行と位置づけられる。なお、東京第二師男子部附小が、改めて児童や地域調査を行い、本格的にコア・カリキュラムへの転換を図る研究に取り組むのは、昭和23(1948)年7月からである。』<sup>(10)</sup>という指摘は、参考になる。しかし、谷本の研究は、小山の取り組みに焦点を当てたものではないため、彼の経歴や彼が執筆した文献には、断片的にしか触れていない。

以上を踏まえ、本稿では、次の手続きで研究を進めることで、上記の目的に答えたい。まず、東京第二男子部附小における社会科単元指導計画の修正について、新教育思想への批判との関係から検討し、社会科研究部の意図を明らかにする。次に、社会科単元指導計画修正の中心となった小山による社会科研究の動向について明らかにする。最後に、小山の社会科研究の動向を踏まえて、社会科単元指導計画修正の実態を明らかにした上で、「作業単元」導入の一端としてどのように捉えることができるのかについて言及したい。

## 2. 東京第二男子部附小における社会科単元指導計画の修正

### (1) 1948年1月以降の東京第二男子部附小の社会科研究の状況

東京第二男子部附小は、1946年12月に教科書局から実験学校に指定され、本格的に社会科の研究を開始し、1947年3月までに、社会科単元指導計画の草案を完成させ、5月に『新しい各科学習指導の研究』（以下、第1次案）を発表している。当時の主事黒澤得男は、この第1次案を「新教育運動の中で日本ではじめて、作られた教育課程」<sup>(11)</sup>と評価した。しかし、のちに、両角（木川）達爾は、「当時まだ文部省では、学習指導要領も教科書も編纂途上にあったもので、その全貌は知る由もなかった」<sup>(12)</sup>中で作成されたため、「文部省でしめした単元選定基準（低学年、中学年、高学年）、学年別指導目標、問題単元及び不十分ではあるが一応まとめた池袋を中心にした社会環境調査、児童の基礎的実態調査等の結果を総合検討してどうにか創り出した作業単元であり社会科学習指導計画」<sup>(13)</sup>と評価している。

そのため、東京第二男子部附小は、第1次案を「その都度批判し修正を加え」<sup>(14)</sup>ていき、1949年度中までに計3回の修正を行っている。1回目の修正は、11月までに行われた。この修正では、第1次案での「作業単元」の理解が不十分であっ

たことを反省し、初等教育研究協議会の研究成果を踏まえて修正し、11月に『社会科と自由研究の指導を試みて』（以下、第2次案）を発表した。2回目の修正は、1948年1月から開始された。この修正に対して、東京第二男子附小は、「約一年間の指導の経験に省みて、新学年度の指導計画の骨子をつくる」<sup>(45)</sup>のために行ったとするが、実際は、第2次案を具体化にあった。それは、第2次案は、第4学年の計画案と第1～6学年の単元の展開を1つずつ作成したものであったためである。そのため、2回目の修正では、全学年に渡る単元表を作成し、それぞれの単元展開を構成することに主眼が置かれた。1948年4月に発表されたのは、『一年の学習指導計画 上巻』『二年の学習指導計画 上巻』『六年の学習指導計画 上巻』（以下、第3次案）のみであった。3回目の修正は、1948年7月から開始された。1948年4月以降の東京第二男子附小では、学習効果の研究を踏まえながら、1学期のみ第3次案の具体化を試みた。しかし、研究を進めるうちに、「更に学習を適確なものとして着実な効果をおさえるばかりでなく、教育全般についても新教育というにふさわしい内容や形態をも確立して、その結果の考察や評価が少なくとも進展しつつある我が国の教育界に貢献するために」<sup>(46)</sup>、7月から本格的な修正作業に入る。この修正作業は、先進校の見学、コース・オブ・スタディの研究、父兄への調査をもとに行われ、その成果は、1949年1～6月までの実践研究を経て、1949年10月に『小学校の学習計画と指導』（以下、第4次案）としてまとめられ、11月4、5日の研究会（「小学校の学習計画と指導」）で公開された。

## （2）社会研究部の意図

以上の1948年1月以降に行われた社会科単元指導計画の修正は、小山、木川、桜福之助等から構成された社会研究部が中心になって進めた<sup>(47)</sup>。社会研究部では、第2次案から第3次案、第3次案から第4次案への修正に際して、次のような意図で修正を行っている。

まず、第2次案から第3次案への修正に際しては、アメリカのカリキュラム論ではなく、実態調査により「児童生活」と「地域社会を中心とした社会生活」を把握し、「作業単元」を選択し、『要領I』の「一般目標」「学年目標」に沿って配列することを重視した。ここでいうアメリカのカリキュラム論とは、「一面児童の生長と発達の段階（スィークエンス）を考え、他面社会科機能（スコープ）をにらんで、此の両者を経としてその座標の上に生きたプロブレムをとらえて学習活動

のわく組みを組織立てる」<sup>(18)</sup>というものである。東京第二男子附小では、こうしたカリキュラム論を用いることを「何だかしっくりと出てこないうらみがある」<sup>(19)</sup>と批判し、「児童の心身の発達と生活の特性」「社会意識の発達」「歴史意識の発達」「生活交渉圏の拡充の状態」と「地域社会を中心とした社会生活の把握」（「社会生活の地理的基礎（位置、気候、地勢、自然環境面積など）」「社会生活の人的基礎（人口分布、職業分布、施設、各種団体など）」「社会生活の基本的機能（経済、保安、交通通信、文化、厚生、政治）」）に基づいて社会科単元指導計画を作成した。

次に、第3次案から第4次案への修正に際しては、特別委員会<sup>(20)</sup>を設置して進めた。この特別委員会の活動について、東京第二男子附小は、次のように述べている<sup>(21)</sup>。

「発足当初は憲法以下教育法規，コース・オブ・スタディーの検討，つづいては内外教育文献の研究，或は進歩的な教育に挺身されている諸学校の研究報告や調査参観等を行い，この間にあって努めて来校される旧職員，父兄，卒業生の意見を質してみた。こうした準備期を経て特に我が校の現実に眼を転じ，好ましい伝統，のぞましくない欠点等を歴史的に反省し，特に教師，児童，父兄共に従来の附属校の性格や，こん後の在り方についても鋭い批判を加え，学校内外の施設の調査，池袋を中心とした山手一帯の地域の特殊性等次第に調査の範囲を拡大した。」

ここから、この修正が、内外の文献の検討や有名校の取り組みの調査、職員・児童・父兄・卒業生や池袋の実態調査に重点を置いて行われたことが分かる。なお、実態調査の重視は、それまでの当校における研究の経過を踏まえ、社会科指導の基盤となる「のぞましい児童の姿」とそれを達成するための「のぞましい心がけ」を構築することに寄与した<sup>(22)</sup>。

この背景には、社会研究部が、当時、「全国的に新教育の理想が叫ばれ、つぎつぎと進歩的なカリキュラムが作製され」<sup>(23)</sup>る状況を批判的に捉えていたことが関係している。のちに、東京第二男子附小は、この時期を「新思潮への抵抗期」とし、次のように述懐している<sup>(24)</sup>。

「都下においては、港区の某有名校の指導計画が、また、兵庫県における、某有名付属小学校がともにその最たるものとして、天下にその名を馳せた。しかしこれらの学校の今日の姿は、当時の華々しいデビューにひきかえて、

あまりにも憐れ、唯々その名のみにて、研究の内容について口にする者は、十年を経過した今日、誰一人としていないのである。では、豊島はどうか。猫もしゃくしも新教育へという時代に、豊島はどうか。一言にして踏み止まったのである。だから今日の研究校としての体面を保てられるのである。当時研究部長は、現在都の教育庁に勤務する小山昌一主事だが、時代をみぬき、少なくとも十年後の今日を予想して、研究方向に誤を犯さなかった功績は、高く評価されてよい。」

ここには、のちに、「現実に根ざさず、一きよに理想をおおうとする学習計画や指導法がみられたり、教育の根本につちかわず、表面的形式的な計画や方法が流行するきらいされ感ぜられた」<sup>(25)</sup>と述べ、東京都港区立桜田小学校や兵庫師範女子部附属小学校をはじめとする先進校の研究を批判的に見ていたことが読み取れる。なお、東京第二男子附小は、1948年11月にコア・カリキュラム連盟にも加盟し<sup>(26)</sup>、先進校の動向を捉えようとしていた。

一方で、小山は、委員として『補説』の編纂にも参加し、文部省でCIEの事務官との関わりが持てる状況にあった。しかし、小山は、「今後の教育は何よりも主体的な判断が第一であり、自主的な対応が重んぜられるので、私などが文部省の委員会でフェファナン女史やヤイデーさんから教えられた事をただものまねするのは好ましくなかった」<sup>(27)</sup>と述べている。そのため、東京第二男子附小は、「ただ我々は、ひたすらに教育実践に打ち込んでいこうと念じて」<sup>(28)</sup>いた。したがって、社会研究部による社会科単元指導計画の修正は、CIEのヘファナンやカリキュラム論者の意見よりも、実態に即して着実な研究を行おうとしていたと捉えることができる。

では、こうした東京第二男子附小による社会科単元指導計画の修正に中心的な役割を果たした小山はどのような研究を行ったのであろうか。次に、文部省内における『補説』編纂の動向を踏まえながら、小山による社会科研究の動向を検討する。

### 3. 小山昌一による社会科研究

#### (1) 『補説』委員としての活動

『補説』は、社会科の実施状況を懸念したヘファナンによる1947年6月25日の提案がきっかけとなって編纂が開始された<sup>(29)</sup>。その間、1947年12月2日に、ヘフ

ァナンは、任期が修了して帰米し、1948年3月へファナンの後任としてヤイディ (Pline Jeidy) が来日する。ヤイディの来日後、長坂端午を中心とする初等社会科委員会の委員との作業が再開され、『補説』は、1948年9月に発行された<sup>90)</sup>。

『補説』の編纂は、次の二つの特色があった。一つは、「作業単元の基底」を作成したこと、もう一つは、現場の教員の中から委員を委嘱したこと、である。前者については、編纂委員長の長坂が、編纂の趣旨として、次のように述べている<sup>91)</sup>。

「学習指導要領補説を刊行する趣旨は、すでにのべたように、単元の作り方、展開のしかたを、くわしく説明することにあります。しかし、単元はあくまでも、個々の教師が、児童や地域の実態に即して作るべきものだという線はくずすことができません。文部省で単元そのものを示すことは邪道であると考えました。そこで、補説で示したのは、単元例ではなくて、各学年の、おもな学習分野をいくつかあげて、それらの分野に関して、単元を、現場の教師が作る方法を示したのです。単元そのものでなく、単元のもとになるものを示したわけです。」

ここから、長坂らは、現場の教師が単元を作る方法を示すために『補説』を編纂したことが読み取れる。そして、この「単元のもと」が、【表1】の「作業単元の基底」であった。

長坂は、この「作業単元の基底」作成の意図について、次のように述べる<sup>92)</sup>。

「私たちは、補説はどこまでも、前の学習指導要領の補説であって、学習指導要領で説明のたりなかった単元の作り方や展開のしかたを、くわしく

【表1】作業単元の基底

学 年	作業単元の主題
第1学年	家庭、学校、友だち、健康な生活
第2学年	近所の生活、農家、商店、郵便集配人、公共のために働く人たち
第3学年	地域社会の生活、動植物と人間の生活、郷土の交通運輸
第4学年	地域社会の現在と過去、昔の交通通信、資源の保護利用、昔の商工業
第5学年	衣食住の発達とその資源、現代の交通・通信・運輸、保健と厚生慰安、政治
第6学年	工業と動力、新聞とラジオ、交易、わが国と関係の深い国々、現在の社会とその将来

(文部省『小学校社会科学習指導要領補説』(1948) 28, 29頁より、筆者作成)

説明するのが使命であるから、その線をくずさない方針を堅持しようと考え、ヘファナン女史の示したものは受け入れないことにしました。間もなく女史が、任期があげて米本国に帰ったことも、私たちにとっては、もっけの幸でした。そこで、学習指導要領に示されている学年の目標や問題を組み合わせ、単元の基底の例を作ることになりました。ヘファナン女史が二十二年の十二月に帰米し、翌年早々に後任が来るというので、こまかい仕事は後まわしにしても、単元の基底例だけは、後任の来る前に作ってしまい、出来上ってしまったものを新たに来た人に示して、いやおうなしにのみこませてしまおうと考えました。」

ここから、初等社会科委員は、『要領Ⅰ』との関連を重視して『補説』を編纂したことが確認できる。つまり、「作業単元の基底」作成は、ヘファナンの意見を拒否し、『要領Ⅰ』とのつながりを図ることにねらいあったのである<sup>(33)</sup>。

後者については、教科書局が、教科書局や東京都の実験学校の教員を委嘱している。主な委員として、東京都港区立桜田小学校の樋口澄雄、東京都中央区立築地文海小学校の向山嘉章と山本甫十、そして、小山がいた<sup>(34)</sup>。委員による作業は、実験学校が作成した社会科単元指導計画の検討、「作業単元の基底」の具体化の2つであった<sup>(35)</sup>。前者は、教科書局や東京都が1946、47年度にかけて指定した実験学校9校が作成した社会科単元指導計画における「作業単元」作成の状況と、その課題を分析するというものである<sup>(36)</sup>。後者は、小山、樋口、山本による「作業単元の基底」に基づく単元の展開の作成である<sup>(37)</sup>。

以上のように、『補説』の編纂において重視されたことは、『要領Ⅰ』との関連を図るために、「作業単元の基底」を作成することであった。そのため、実験学校の教員を委員として委嘱し、現場の状況の把握と完成した「作業単元の基底」に基づく単元開発を行ったのである。その際、小山は、主に「作業単元の基底」の具体化にかかわったと言える。

## (2) 「作業単元」展開の作成

こうした中で、小山は、教育雑誌に「作業単元」の展開を次々と発表した。東京第二男子附小で社会科単元指導計画の修正が行われた1948年4月から1949年末までの間に、小山が発表した論考をまとめたものが【表2】である。

【表2】から、小山による社会科研究の特徴として、次の2つのことが確認でき

る。1つ目は、『補説』委員として「作業単元の基底」(【表1】)に基づく「私たちの町の交通」(2年)、「郷土のかいほつ」(4年)の展開案を報告した1948年10、11月を境に、その前後で単元の性格が変化していることである。具体的には、1948年10、11月以後に作成された「電車と汽車」「動物と私たちの生活」「私たちの町」は、『補説』の「作業単元の基底」の「郷土の交通運輸」「郷土社会の生活」「動植物と人間の生活」を具体化したものである。2つ目は、様々な研究を行いながら、次第に単元を深化させていったことである。例えば、「いろいろな乗物」「私達の町の交通」「電車と汽車」では、次のように単元の展開が変化している。「いろいろなりのもの」では、「(一) 作業単元」「(二) 単元の価値」「(三) 実施上の便宜」「(四) 指導の構想」「(五) 実際指導」であったが、「私達の町の交通」では、「一、単元構成の趣旨」「二、単元の効用」「三、指導の根本方針」「四、実際指導」(「(1) 導入」「(2) 学習活動の発展」)に変化している。これは、第2次案の具体化した第3次案の「いろいろなりのもの」<sup>(38)</sup>が、「作業単元の基底」を研究し、単元展開を具体化する中で、「私達の町の交通」へと深化させたことを意味する。また、「電車と汽車」になると、「作業単元の基底」の具体化に加え、児童に「理解させたいこと」、身につけるべき「生活態度や技能」を明確化し<sup>(39)</sup>、効果判定のための考査問題を作成している。この背景には、小山が、1949年3月の論考「学習効果の調べ方」「モチベーションとエバリエーション」から分かるように、単元展開の作成に加えて、考査問題の開発に基づく学習効果の研究を重視していたことがあると考えられる。

以上から、小山が1948年以降に発表した論考には、『補説』発行以前は、初等教育研究協議会の研究成果を踏まえて作成された第2次案の単元の詳細をまとめた第3次案の「作業単元」の具体化、『補説』発行後は、「作業単元の基底」の具体化、という傾向がみられる。また、小山は、『補説』の「作業単元の基底」の具体化と同時にを行った学習効果の研究を踏まえて、独自の単元を作成していた。

次に、東京第二男子附小による社会科単元指導計画修正の実態を明らかにする。具体的には、第3次案から第4次案への単元配列、単元構成の変化について、上記の小山の研究成果との関連から検討することで、社会科単元指導計画修正の実態を明らかにしたい。

【表2】 小山昌一の論考(1948.4~1949.12)

年	月	論考	単元名
1948	4	「社会科：大昔のくらし」（『小学四年生』第3巻第4号，1948年4月）28，29頁。	「大昔のくらし」
	5	「社会科：村はどんなにしてひらけてきたか」（『小学四年』第3巻第5号，1948年5月）22-24頁。	
	6	「社会科：ちよっとのくふうでみんなにここ」（『小学三年の学習』第3巻第3号，1948年6月）6-9頁。	「私たちの学校」
		「社会科：おもしろい家のお話」（『小学四年』第3巻第6号，1948年6月）16，17頁。	
	7	「社会科：昔の人のたべものはなし」（『小学四年』第3巻第7号，1948年7月）32，33頁。	
	8	「9月の実際指導：社会科教育私案」（『学習活動』第1巻第1号，1948年8月）15-17頁。	「いろいろな乗物」
	9	「10月の実際指導：社会科教育私案」（『学習活動』第1巻第2号，1948年9月）13-15頁。	「貨物と貨物列車」
		「社会科：馬鈴薯王ジョージ・シマさん」（『小学四年』第3巻第9号，1948年9月）24-26頁。	
	10	「なにからなにが？：社会」（『小学三年の学習』第4巻第6号，1948年9月）12，13頁。	
		「社会科：人間のすばらしい足」（『小学四年』第3巻第10号，1948年10月）24-26頁。	
		「11月の実際指導：社会科教育私案」（『学習活動 小学三年』第1巻第3号，1948年10月）6-9頁。	「役立つ動物」
「10月のおべんきょう：エクササイズのページ」（『小学三年の学習』第4巻第7号，1948年10月）51-66頁。			
11	「補説による作業単元展開案（十、十一月期）：二年「私達の町の交通」（『社会科研究』第1巻第2号，1948年10月）15-22頁。	「私達の町の交通」	
	「学習意欲の出ない子供の考察」（『学習活動』第1巻第3号，1948年11月）9-11頁。		
	「12月の実際指導：社会科教育私案」（『学習活動 小学三年』第1巻第4号，1948年11月）4，5頁。	「役立つ動物」	
	「社会科：ひらけ行く村」（『小学四年』第3巻第11号，1948年11月）20，21頁。		
	「補説による作業単元展開案（十一月・十二月期）：四年「郷土のかいほつ」（『社会科研究』第1巻第3号，1948年11月）20-25頁。	「郷土のかいほつ」	
		「エクササイズの頁：社会」（『小学三年の学習』第4巻第8号，1948年11月）46-58頁。	
1949	1	「『電車と汽車』の社会科指導」（『小三教育技術』第2巻第10号，1949年1月）8-12頁。	「電車と汽車」
	2	「一連の学習活動の考察」（『小三教育技術』第2巻第11号，1949年2月）6-9頁。	「電車と汽車」
		「社会科 学習効果の調べ方」（『小三教育技術』第2巻第12号，1949年3月）5-7頁。	「電車と汽車」
	3	「モチベーションとエバリエーション（三年）」（『6・3教室』第3巻第3号，1949年3月）36-41頁。	「動物と私達の生活」
	4	「社会科単元学習の展開 私達の町」（『小三教育技術』第3巻第1号，1949年4月）7-10頁。	「私達の町」
	5	「社会科単元学習の展開 生きた学習活動の工夫」（『小三教育技術』第3巻第2号，1949年5月）10-12頁。	
		「型にはまりかかった社会科指導」（『学習活動 小三』第2巻第3号，1949年5月）16-18頁。	
	6	「社会科学習効果の考查問題—四月以降掲載の単元『私達の町について』—」（『小三教育技術』第3巻第3号，1949年6月）10-13頁。	「私達の町」
		「グループ活動について」（『社会科教育』第21号，1949年6月）21-23頁。	
	7	「単元学習の展開 社会科」（『小三教育技術』第3巻第4号，1949年7月）10-13頁。	「動物と私達の生活」
		「グループ活動について（続）」（『社会科教育』第22号，1949年7月）35，36頁。	
	8	「社会科九月の単元展開—（第2学期の社会科指導計画）—」（『学習活動 小三』第2巻第5号，1949年8月）14-23頁。	「動物と私達の生活」
9	「社会科十月の指導—動物と私達の生活—」（『学習活動 小三』第2巻第6号，1949年9月）16-26頁。	「動物と私達の生活」	
	「十一月の社会科指導の展開」（『学習活動 小三』第2巻第7号，1949年10月）25-34頁。	「動物と私達の生活」	
10	「新しい社会科の家庭での導き方」（『日本PTA』第16号，1949年10月）22-27頁。		
12	「社会科の指導方法を貫くもの—特に単元学習の導入について—」（『教育復興』第2巻第10号，1949年12月）14-18頁。		

(筆者作成)

#### 4. 社会科単元指導計画修正の実態

##### (1) 単元配列の変化

【表3】は、東京第二男子附小が作成した第3次案から第4次案への単元配列の変化を表したものである。ここから、単元数と単元名について、次のような変化を確認できる。

1つ目は、単元数が大幅に削減されていることである。第3次案では39個あった単元が、第4次案では24個になっている。2つ目は、名称を変更した単元に、『補説』の「作業単元の基底」(【表1】)と合致するものが多く含まれていることである。具体的には、1年の「1. 私たちの学校」「2. 丈夫なからだ」「3. 私たちのおうち」「5. おともだち」、2年の「2. 近所の生活」「4. 郵便」、3年の「3. 動植物と人間の生活」、4年の「1. 東京の今と昔」「2. 資源の保護利用」「3. 昔の商工業」、5年の「1. 衣食住の改善」「3. 交通運輸の発達」、6年の「1. 新聞とラジオ」「3. 近代工業」「5. よりよき社会」等がそれにあたる。

【表3】単元表の変化

一年	1948.4	1. 私たちの学校	2. 電車の車しようさん	3. 私たちのおうち	4. お百姓さん	5. 私たちの近所	6. おまわりさん		
	1949.1	1. 私たちの学校	2. 丈夫なからだ	3. 私たちのおうち	4. おみせ	5. おともだち			
二年	1948.4	1. 私たちの学校	2. 私たちの町	3. お百姓さん	4. おみせやさん	5. 火の用心	6. ゆりのびん	7. 病気とおいしゃさま	8. みんなのもの
	1949.1	1. 二年生の春	2. 近所の生活	3. 田舎と町	4. 郵便				
三年	1948.4	1. 私たちの一日	2. 私たちの町	3. いろいろなりもの	4. 成美荘	5. 配給所	6. 郷科	7. 町の病院	8. 南洋の人々のくらし
	1949.1	1. 自治会	2. 私達の町	3. 動植物と私達の生活	4. 町の病院				
四年	1948.4	1. 大昔の人々の生活	2. 豊島区と東京都	3. 東京の交通	4. 国民の職業	5. 自然のめぐみ	6. 物はどんなにつくられたか	7. ものの節約と保存	
	1949.1	1. 東京の今と昔	2. 資源の保護利用	3. 昔の商工業					
五年	1948.4	1. 農業生活	2. 病気と病院	3. 水産業	4. 山の資源	5. 衣料生活	6. 輸送と旅行		
	1949.1	1. 衣食住の改善	2. 交通運輸の発達	3. 東京都の復興					
六年	1948.4	1. 新しい憲法	2. 通信の発達	3. 近代工業	4. 日本と諸外国				
	1949.1	1. 新聞とラジオ	2. 健康生活	3. 近代工業	4. 日本と諸外国	5. よりよき社会			

※「1948.4」が第3次案、「1949.1」が第4次案を表す。

※下実線は、『補説』の「作業単元の基底」に基づいて修正されたと考えられる単元を表す。

※網掛けは、第3次案と第4次案で名称に変化がない単元を表す。

(小山昌一「社会科学学習指導案の修正について(二)」(『社会科教育』第12号, 1948) 30頁, 東京学芸大学豊島附属小学校『小学校の学習計画と指導』(豊科書房, 1949) 25頁。)

以上から、第4次案では、初等教育研究協議会の「作業単元」に基づいていた第3次案を『補説』の「作業単元の基底」を参考にしながら変更させたと解釈することができる。

## (2) 単元構成の特徴

次に、小山が作成した第3,4学年の単元の中から、「私達の町」をとりあげて検討したい。「私達の町」の展開を表したのが、【表4】である。

「私達の町」の単元は、「一、単元設定の趣旨」「二、目標」「三、評価の基準」(「理解」「態度」「技能」)「四、児童の生活問題と関心」「五、学習相互の関連」から構成されている。この単元の展開を修正前の第3次案と比較すると、次の2点の特徴が確認できる。1つ目は、単元の構成が変化していることである。第3次案では、「(一) 作業単元」「(二) 取材の意図と単元の価値」「(三) 実際指導の構想」という3つの構成であった<sup>(40)</sup>。よって、「三、評価の基準」において評価基準の明確化するとともに、児童の実態調査の成果を踏まえて「四、児童の生活問題と関心」を新たに設けている点で異なっている。また、『補説』と比較すると、「作業単元の基底」をそのまま具体化したものではないことが確認できる。『補説』では、「一、単元の効用」「二、単元の導入」「三、学習活動の発展」という構成になっている<sup>(41)</sup>。2つ目は、他教科の内容がかなり入りこんだ、コア・カリキュラム的な構成となっていることである。社会科を単元学習とし、国語、算数、理科、音楽、図画工作を系統的分科学習とし、それぞれの関連で「私たちの町」の学習が展開されている。そのため、「三、評価の基準」には、「植物の成長は太陽の熱、光が必要であることを知る」という理科的な内容、「えんそくの図画で時間的な表現を知る」という図画工作科のような内容の理解を目指している。

このように単元構成が変化した背景には、「3.」で検討した小山の研究動向を踏まえると、次の2つのことがあったと考えられる。1つ目は、小山が「私達の町」を作成する前に発表した「いろいろなのりもの」「私達の町の交通」等の交通に関わる内容も含めた大単元としたことである。「3.」で述べたように、小山自身は『補説』の「作業単元の基底」の「地域社会の生活」「郷土の交通運輸」の具体化も試みている。しかし、第4次案では、これらに相当する単元は「私たちの町」のみであるとともに、「私たちの町」は、交通を含めた内容である。したがって、小山は、2つの単元を合わせて、「私たちの町」の単元を作成したと考えられる。

【表4】「私達の町」の構成

3年1学期 作業単元「私達の町」	
一、単元設定の趣旨	<p>○この単元は二年の「近所の生活」「田舎と町」などの経験に基づいて展開し、四年の「東京の今と昔」につながる</p> <p>○交通運輸に対する経験の発展はこの期の児童の、のりもに対する深い関心とその活動意欲にこたえる</p> <p>○遠足や成虫担任作業などの生活経験は、町と田舎との相互依存関係を理解させるのに留まらぬ</p> <p>○春、夏の季節に關係した理科学習をはじめ他の分化学習とも多く連関して学ばれる</p> <p>○いろいろな形で発展する池袋の町を理解することから、歴史的にさかのぼって、昔の池袋の町の様子や人々の生活を探究するようにする</p>
二、目標	<p>○町の人々は生活に必要な物資を手に入れるために協力し合っていることを理解する</p> <p>○人々はそれぞれの職業を通して協力し合っていることを知る</p> <p>○町と田舎とは生活必需品を交易しあっていることを理解する</p> <p>○交通機関が田舎と町をつなぐ町の発展に大きな役割をなしていることを理解する。</p> <p>○自然的ないろいろな条件が人々の生活に大きな影響を与えること、人々はよりよい生活条件を求めて移動していく傾向のあることを理解する</p> <p>○厚生恵安の上でも田舎と町とは相互に依存し合っていることを知る</p>
三、評価の基準	<p>○町にはみんなのための建物があつて、そこには多くの人々が働いていることを理解する（組織と機能）</p> <p>○衣食住物資の主要なものについて、その入手する方法を知る（町で出来るもの、田舎から買うもの、他の土地に求めるもの）</p> <p>○町にあるいろいろな交通機関についてそれがどんな役目をしているかを理解する</p> <p>○交通機関は人々の努力で昔からだんだん発達して来たこと</p> <p>○厚生恵安の活動は環境によっていろいろあること、娯楽機関についても町と田舎とは依存しあっていることを知る</p> <p>○村や町の大体の地図を作ることが出来る（主として給地図を中心にしたもの）</p> <p>○地図の大体についてよむことが出来る</p> <p>○公共施設（駅の見学、遠足）の見学に行つてつらばな態度をとることが出来る（礼儀正しいこと、人に迷惑をかけること、感謝の心をもつこと）</p> <p>○町のおこりとその頃の人々の生活の様子を知る（町の発達と人々の努力につながる）</p> <p>○町の人々はさまざまな職業に従事していること（村の人々の職業につながる）</p> <p>○心身の劣っているものに対して思いやりを持つ態度が出来る</p> <p>○方位を知るのに磁石をつかう技能が出来る</p> <p>○種子にはいろいろな形や大きさがあること</p> <p>○種や球根から新しい植物が芽生えることを知る</p> <p>○ほから水分や養分を吸収していること、葉は水分を蒸発させたり吸収したりしていることへの理解</p> <p>○継続して観察する能力</p> <p>○交通の安全に気をつける態度</p> <p>○仕事を分担し、責任感をもって協力することが出来る</p> <p>○磁石は南北をさすことを知る</p> <p>○東北の方位は磁石の針に直角であること</p> <p>○植物の成長は太陽の熱、光が必要であることを知る</p> <p>○植物は春になると成長の早いことを知る</p> <p>○植物の成長には太陽の熱、光が必要であることを知る</p> <p>○物ごとを關係的に見る能力</p> <p>○事実をありのままにつかまえる能力</p> <p>○比較観察したり、記録したりする能力</p> <p>○えんそくの図面で時間的な表現を知る</p> <p>○紙芝居に表現することが出来る</p>
四、児童の生活問題と関心	<p>○いろいろな生活に必要な品物を手に入れるには、私達はどうすればよいか</p> <p>○土地いよって交通運輸の方法がどんなに違っているか、それはどんな理由からか</p> <p>○餅や夕方電車は何故混雑するのだろうか</p> <p>○田舎の生活と町の生活の違いはどんな理由からか、お互にどんなおかげを受けているか</p> <p>○土地によって恵安娯楽の方法はどんなに違うか</p> <p>○学校のまわりの町をもっときれいにしたい（やみーのところからきたくないやだ）</p> <p>○いろいろな乗物についてしらべたい。昔の乗物と今の乗物とくらべてみよう</p>

五、学習相互の関連		○歴上よりの展望、磁石の扱いは学習をなるべく総合的に扱う ○種まきと植えつけは単元学習の中に於て実施する ○人のかず、車しらべの算数は単元学習の経験から発展して整理する ○成美荘、飯能遠足などの機会には、経験の統一的な発展をはかるようにつとめる ○園工「働く人々」は駅の人々から社会の相互依存関係を考えつちいろいろの人々の働く場面に発展する ○八十八夜の合字については学習「たねまき」の連関させる				
		単元学習		系統的分科学習		
月	予想される学習活動	国語	算数	理科	音楽	図画工作
五	◎屋上から学校付近の町を眺めよう ◎学級園の手入や種まきをする ◎学校を中心にした町の絵図をつくろう	まどをあけると 心と心	町のたてもの 人のかず のりものしらべ	磁石あそび 水さいばい 石ひろい	雲と風 いけの雨	笛づくり 色の明度 町のかんばん
六	◎飯能遠足にでかけよう ◎武蔵野線ごっこをしよう ◎電車の混雑するわけをしらべよう	金のさかな 学級日記から あさがおの花 石炭 りようかんさん	えんそく でん車のかず 水やさんごっこ いもほり はいきゅうごっこ	水車と風車 夏の野山 天の川	からす かい 池のこい ぼんおどり	形あつめ 働く人々 家 はかり
七	◎成美荘へ行こう ◎田舎と町のがい、つながりをよくしらべよう ◎学級小学芸会をしよう	星	プール開き			はいきゅうじよ

(東京学芸大学豊島附属小学校「小学校の学習計画と指導」(蓼科書房, 1949) 72~76頁より筆者作成)

同時に、このことと関連して、当時、東京第二男子附小が、「社会科の学習活動は、他教科にささえられなければ、それ自身が低調な経験活動となってしまう」<sup>(42)</sup>と捉えていた。このことが、他教科との関連を意識した大単元の作成へと繋がったと考えられる。ただ、「2.」でも言及したように、東京第二男子附小は、アメリカの教育思潮に批判的であったため、コア・カリキュラムという用語は使用していない。2つ目は、小山による単元構成の研究の進展が、上述の単元構成に近づけたことである。「3.」でも述べたように、小山が発表した単元の構成は、「(一) 作業単元」「(二) 単元の価値」「(三) 実施上の便宜」「(四) 指導の構想」「(五) 実際指導」による構成から、「一、単元構成の趣旨」「二、単元の効用」「三、指導の根本方針」「四、実際指導」(「(1) 導入」「(2) 学習活動の発展」)、さらには、児童に「理解させたいこと」や身につけるべき「生活態度や技能」を明確化したものへと変化している。

したがって、「私達の町」は、小山が学習効果の研究を進める中で、「理解」「態度」「技能」という児童に身につけさせることを明記しつつ、初等教育研究協議会の「作業単元」から、『補説』の「作業単元の基底」を具体化する中で独自に作成された単元であると解釈できる。

## 5. 結語

本稿では、1947年度の教科書局実験学校である東京第二男子附小による1948年以降の社会科単元指導計画修正の実態について、小山教官の研究動向に着目して検討してきた。

以上の検討から、次のことが明らかになった。第一に、東京第二男子附小が、1948年1月から1949年度中にかけて行った社会科単元指導計画の修正は、アメリカの教育思潮への批判的検討を行う中で実施された。第二に、東京第二男子附小の社会科研究の中心であった小山は、『補説』の「作業単元の基底」の具体化と学習評価の研究を踏まえた単元を作成した。第三に、東京第二男子附小による社会科単元指導計画の修正は、初等教育研究協議会の研究成果をもとに作成した第3次案の「作業単元」から、『補説』の「作業単元の基底」を具体化する中で行われた。また、単元構成に着目すると、『補説』の「作業単元の基底」の具体化を図りつつも、学習効果を重視した独自のものを作成したことが確認できた。ここから、東京第二男子附小では、『補説』以前に米国流の「作業単元」を導入しつつも、『補説』の編纂に歩調を合わせながら、「作業単元」を作成していったと解釈できる。

以上から、東京第二男子附小のような教科書局が指定した実験学校では、初等教育研究協議会でヘファナンが紹介した「作業単元」の基本的な構造を理解し、学習評価の研究を踏まえつつ、「作業単元」を作成する動きがあったと言える。また、それは、『要領Ⅰ』の具体化を目指したものであったため、『要領Ⅰ』の理念を継承して編纂された『補説』に基づきながら、当校の事情に合わせて行われた。したがって、現場実践への「作業単元」の導入は、先行研究にあるように『補説』の発行が契機となったというだけでなく、初等教育研究協議会の成果と『補説』の編纂に歩調を合わせた試行錯誤の中で導入されていったと捉えることができる。

## 註

- (1) 文部省『学習指導要領一般編（試案）』（1947）12頁。
- (2) 重松鷹泰『社会科教育法』（誠文堂新光社、1958）74頁。
- (3) このことは、次の研究で指摘されている。木村東一郎『日本の社会科十年史』（櫻書院、1956）、船山謙次『社会科論史』（東洋館出版、1963）、岡津守彦編『戦後日本の教育改革 第7巻 教育課程（各論）』（東京大学出版会、1969）44-46頁、山口康助『昭和20年代・初期社会科の性格』（『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』28、1976）97-

- 113頁, 平田嘉三, 初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』(教育出版, 1986), 小原友行『初期社会科授業論の展開』(風間書房, 1998)。
- (4) 「作業単元」が各学校のカリキュラム開発を促進したことは次の文献で指摘されている。船山, 前掲(註3)6, 7頁, 岡津, 前掲(註3)44-46頁, 小原, 前掲(註3)39頁。
- (5) 谷本美彦「初期社会科教科課程史研究(Ⅳ)~(Ⅵ)」(『宮崎大学教育学部紀要 教育科学』64~66, 1989)23-36頁, 53-64頁, 33-45頁, 小原, 前掲(註3), 鈴木円『『小学校社会科学習指導要領補説』における「作業単元」展開の特質—『社会科作業単元展開の実際』との比較から—』(『学苑』788, 2006)48-61頁。
- (6) 『補説』の作成過程をCIEと文部省との関わりを踏まえて考察した谷本氏が次のように述べている。「その作成意図については, や, 一般には, 『社会科編(1)』の不備が分かりにくいという現場からの声に応じて作成されることになったと考えられている。しかし, 授業も開始されていない時期の決定であり, 前述の通説には疑問がある。」(谷本美彦『『小学校社会科学習指導要領補説』の性格—『社会科編Ⅰ』の補説か改訂版かの検討を中心に—』(全国社会科教育学会第61回全国研究大会(於岐阜大学)発表資料, 2012年10月21日)
- (7) 拙稿「東京第二師範学校男子部附属小学校における『作業単元』の導入過程—文部省教科書局実験学校による社会科単元指導計画作成の役割—」(日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第21号, 2012)1-14頁。
- (8) 本橋幸康「昭和20年代前半における東京第二師範学校男子部附属小学校(東京学芸大学附属豊島小学校)の実践」(『国語教育史研究』第2号, 2004)14-23頁。
- (9) 工藤哲夫「カリキュラム構想とことばの教育—1949年東京学芸大学三附属小学校の研究—」(『東京学芸大学附属学校研究紀要』第37号, 2010)157-167頁。
- (10) 谷本美彦『科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 成立期社会科教育の実践構造の研究—戦前及び米国教育との連続面と独自面の解明—』(2012)313頁。
- (11) 当時の主事である黒澤得男は, 「新教育運動の中で日本ではじめて, 作られた教育課程」と評価している。(黒沢得男「日本教育の支柱たれ」(東京学芸大学附属豊島小学校『学報 創立五十周年記念誌』(1961)127頁。)
- (12) 両角達爾「社会科実践感想」(『新教育研究』第6号, 1947)12頁。
- (13) 両角達爾, 前掲(註12)12頁。
- (14) 小山昌一「社会科学習指導案の修正について(一)」(『社会科教育』第10号, 1948)24頁。
- (15) 小山昌一, 前掲(註14)24頁。
- (16) 東京学芸大学豊島附属小学校『小学校の学習計画と指導』(蓼科書房, 1948)10頁。
- (17) 社会研究部では, 小山が中学年, 木川が低学年, 桜が高学年を担当した。
- (18) 小山昌一, 前掲(註14)25頁。
- (19) 小山昌一, 前掲(註14)25頁。
- (20) この特別委員会は, 「教育の重点を特に研究するために校内に五名の職員」により設置された。(東京学芸大学豊島附属小学校, 前掲(註16)15頁。)

- (21) 東京学芸大学豊島附属小学校，前掲（註16）15頁。
- (22) 東京第二男子附小は，第一次案の作成においては，児童の実態調査（「勤労調査」「読物調査」「児童の発達調査」「遊びの調査」「知能調査」「自治会調査」「情意発達段階調査」「児童の人間像」），第二次案の作成においては，この児童の実態調査に加えて，郷土社会調査（「イ，社会の形大きさ一面積等地理的問題を主として」「ロ，位置，所在」「ハ，其の地域の歴史」「ニ，住民」「ホ，生計」「ヘ，社会の組織」「ト，社会の公共衛生」「チ，娯楽及び文化的施設」「リ，住宅の状況，復興計画」「ヌ，福利施設」「ル，その他」）を行っている。詳しくは，拙稿，前掲（註7），及び，拙稿「東京第二師範学校男子部附属小学校の社会科単元指導計画作成における『文化活動』『自治活動』『復興活動』の役割—1947年度指定文部省教科書局実験学校による社会科実施過程の一端」（『学校教育学研究紀要』第6号，2013）33—54頁を参照。
- (23) 東京学芸大学附属豊島小学校『児童の発達の再検討と指導法の研究』（牧書房，1952）3頁。
- (24) 研究部「研究校『豊島』の歩み—戦後十五年間—」東京学芸大学付属豊島小学校『学報 創立五十周年記念誌』（1961）247，248頁。
- (25) 東京学芸大学附属豊島小学校，前掲（註23）3頁。
- (26) 「加盟校及び加盟者名簿」（コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』第1号，1949）39頁。
- (27) 小山昌一先生ご勇退記念の会編『激動の教育—小山昌一・人とその教育—』（表現社，1976）81頁。
- (28) 東京学芸大学豊島附属小学校，前掲（註16）15頁。
- (29) GHQ/CIE，Report of Conference，25 June，1947. CIE(C)-00358.
- (30) CIEの事務官と文部省の事務官の間で行われた『補説』の編纂過程については，長坂端午の回顧「社会科の生いたち」（『信濃教育』第826号，1955）に詳しい。
- (31) 長坂端午「社会科の生いたち」（『信濃教育』第826号，1955）37頁。
- (32) 長坂端午，前掲（註31）50，51頁。
- (33) このことは，鈴木円，前掲（註5）でも述べている。しかし，この解釈については，占領下で複雑な経緯を経て作成された『補説』の詳細な作成過程の分析に基づいて，再検討する必要がある。本稿では，東京第二男子附小の実態解明に主眼を置いているため，『補説』の編纂過程は別稿に譲り，作成責任者である長坂の回顧（前掲（註24）を踏まえ，上記の解釈に依拠する。なお，本稿の内容を日本社会科教育学会（2012年9月30日）で発表後，谷本が『補説』の作成経緯と性格を分析し，全国社会科教育学会（2012年10月21日）で報告している。谷本も，『補説』の作成経緯の複雑さと解釈の難しさに言及している（谷本美彦，前掲（註6））。
- (34) 現場教員から選ばれた補説委員については，雑誌『社会科研究』第1巻第3号の「『補説』活用特集」や石川二郎の回顧，向山嘉章の回顧等から確認できる。
- (35) 補説委員の職務については，関係者の回顧から知ることができる。当時の小山と文部省における『補説』の編纂との関わりについて，石川二郎は次のように述べている。

「小山君は、小学校の社会科を担当されていた重松先生を助け、同期の山本甫十君らとともに現場教師としての立場から新しい社会科の単元の構成や展開の実施案を作成し、小学校社会科の基礎づくり肉付けに大いに貢献された。」(石川二郎「友として」(小山昌一先生ご勇退記念の会編, 前掲(註27) 62頁, 石川二郎「弔辞」重松鷹泰告別式原稿, 1995年8月11日。) また、向山は、実験学校で作成された資料を収集し、社会科の実施状況の分析に当たるとし、次のように述べている。「文部省では附属小学校や実験学校で行った社会科の経験に鑑み、何とかしなければならないということから、ここに小学校学習指導要領補説の編集が企画され各方面の資料を整理し、七月の下旬から愈々具体的な仕事にとりかかったのである。私が補説の編集に関係したのはこの頃で、先ず最初に単元の蒐集を試みた。」(向山嘉章『カリキュラムの中心問題としての単元の研究』(西荻書店, 1949) 141頁。) 本稿では、小山の活動として、前者の単元展開の具体化に着目する。

- (36) 向山は、『補説』の編纂に際して、分析した資料について、次のように述べている。「私の手元に集った資料は、東京師範男子部附属小学校、東京第二師範女子部附属小学校、神奈川師範女子部附属小学校、川口市案、新潟第二師範男子部附属小学校、長野師範男子部附属小学校、群馬師範男子部附属小学校、栃木師範女子部附属小学校の九案で、何れも七月には一応の成得を案た所の実験学校のものである。」(向山嘉章, 前掲(註35) 141, 142頁。)
- (37) 3人は、雑誌『社会科研究』第1巻2号(1948年10月)と1巻3号(1948年11月)に、次の単元を載せている。山本は、「強いからだ」(1年)「郵便ごっこ」(2年)、小山は、「私達の町の交通」(2年)「郷土のかいはつ」(4年)、樋口は、「漁業」(5年)がそれぞれである。
- (38) 第2次案の内容については、拙稿、前掲(註7)を参照。
- (39) 小山昌一「一連の学習活動の考察」(『小三教育技術』第2巻第11号, 1949) 6, 7頁。
- (40) 第3次案では、2学年と3学年で「私たちの町」の単元が行われている。第4次案では、2学年の「私たちの町」を削除している。東京第二師範男子部附属小学校『二年の学習指導計画 上巻』(自由の学習社, 1948) 66-70頁。
- (41) 文部省『小学校社会科学学習指導要領補説』(1948) 38-43頁。
- (42) 東京学芸大学豊島附属小学校, 前掲(註16) 24頁。

【付記】本稿は、日本社会科教育学会第62回全国研究大会(於東京学芸大学, 2012年9月30日)で報告したものに一部修正を加えたものである。

Effects of “The Supplement to the Course of Study for Social Studies in Elementary Schools”(1948) on the Revisions of Social Studies Unit Teaching Plans of the Elementary School Attached to the Tokyo Second Normal School for Men:  
Focusing on the Role of Research Activities of Sho-ichi KOYAMA

Masanori SHINOZAKI

The objective of this paper is to focus on and clarify the role of research activities of Sho-ichi KOYAMA, who was a member of the compilation committee for “The Supplement to the Course of Study for Social Studies in Elementary Schools,” and to highlight one part of the introduction of the “unit of work.” This was done with regard to the actual conditions for the revisions to social studies unit teaching plans that were carried out from 1948 onwards in the Elementary School Attached to the Tokyo Second Normal School for Men, which was designated as an Experimental School by the Textbook Bureau of the Ministry of Education in 1947.

In this paper, from an investigation of research trends from 1948 onwards, the initiatives of the Social Studies Research Division are clarified and, based on trends in social studies research by KOYAMA on which these initiatives were centered, the actual conditions of the revisions to social studies unit teaching plans are also clarified. In addition, the characteristics of the introduction of the “unit of work” are discussed.

The findings of this research are as follows. First, the initiatives of the Social Studies Research Division with regard to its revisions to the social studies unit teaching plan from 1948 to 1949 were enforced based on a critical examination of the trends in educational thought in the United States at that time and the importance it placed on investigations of actual conditions. Second, KOYAMA worked on creating units based on the formulation of “the foundation of the unit of work” of “the Supplement” and through evaluation studies. Third, from the third proposal that was based on research findings of the Seminar in Elementary Education, revisions to the social studies unit teaching plan were carried out to formulate the “the foundation of the unit of work” of “the Supplement.” Additionally, based on KOYAMA’s research, the unit was prepared

independently by emphasizing learning effects, while continuously aiming to formulate “the foundation of the unit of work.” From this, even though the U.S. style “unit of work” was introduced to the Elementary School Attached to the Tokyo Second Normal School for Men prior to “the Supplement,” it can be interpreted as the creation of a “unit of work” coordinated with the compilation of “the Supplement.”

From the above, it can be said that in the schools designated as Experimental Schools by the Textbook Bureau, such as the Elementary School Attached to the Tokyo Second Normal School for Men, the fundamental structure of the “unit of work” introduced by Heffernan in the Seminar in Elementary Education was clarified and while it was also based on research on the evaluation of learning, there was a movement to create a “unit of work.” Additionally, as this was formulated with the aim of becoming Course I, while being based on “the Supplement” compiled to succeed the Course I concept, it was carried out in accordance with the actual conditions at this school. Therefore, as was indicated in prior research, the introduction of “the unit of work” into actual schools became not only an opportunity for the publication of “the Supplement,” but also a concept that could be positioned as a process introduced by trial and error that was coordinated with the findings of the Seminar in Elementary Education and the compilation of “the Supplement.”